

論文の内容の要旨

論文題目 全身性エリテマトーデスにおけるT細胞クローナリティーの検討

指導教官 東京大学医学部アレルギーリウマチ科
山本 一彦

提出者 間藤 卓

要旨

全身性エリテマトーデスの病態を形成するにあたり、T細胞の活性化が重要な役割を果たすのではないかと考えられている。このことを検証するために、RT-PCR(reverse transcription PCR)法とSSCP(single strand conformation polymorphism)法を組み合わせたT細胞クローナリティーの検出法を用い、SLE患者の末梢血および病巣に集積するT細胞の解析を行った。

その結果、非活動期の長く続いた寛解状態のSLE患者末梢血においては、T細胞クローンの集積は殆ど認められなかった。一方、増悪期のSLE患者の末梢血においては、著明なクローンの集積が多数観察されたが、T細胞クローンのTCR (T cell receptor) V β 鎖の検出頻度に偏りは認められなかった。さらに、このT細胞クローンの集積は、病態が改善するにつれて減少を示し、クローン数と病勢には高い相関が示された。くわえて、ループス漿膜炎を呈した患者の胸水および心嚢液からは、さらに多くのT細胞クローンが検出された。検出された多くのクローンは、隔たった病巣部位に共通して存在しており、さらにその一部は末梢血にも認められた。

今回観察し得た、①T細胞クローンの集積度が、SLEの活動度とよく相関すること、②一部のT細胞クローンが、SLEの病変部位に共通に集積している、の事実は、SLEの病態の形成にT細胞クローンが関与している可能性を強く示唆するものと考えられた。